

中高6ヶ年を見通した古典の教材編成

(その予備的調査3ならびに試行的実践2)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・石塚 修・鹽谷 健
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一
福田 孝

中高6ヶ年を見通した古典の教材編成

(その予備的調査3ならびに試行的実践2)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・石塚 修・鹽谷 健
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一
福田 孝

1. はじめに

本校国語科では、学校の特色を活かし、中・高6ヶ年を見通した教材の編成を主眼として研究プロジェクトを進めてきた。現在は、古典教材の編成を中心として研究を進めているところである。

前年度は、教材編成のための予備的調査として、一昨年「住居・衣服の名称」「いろはガルト」の調査に引き続き、「小倉百人一首」の知識の調査を実施し、現在の中・高生の古典についての素養の実態を洗い出し、今後の教材編成の上で、どのような点が問題となるのかを考えた。

また、試行的実践としては、中学校での入門期の新教材の開発として、お伽草子「浦島太郎」の授業実践(須藤 敬)と、高等学校での「源氏物語絵巻」を使つての『源氏物語』の授業実践(石井正巳・現 東京学芸大学)を行い、その結果を検討・考察した。

今年度は、生徒の古典素養の調査として、『古今和歌集』の部立てを利用した季節感の調査を実施すると同時に、中学生を対象として3ヶ年を通しての和歌の授業の試行的実践を行った。

学校5日制や新教育課程が実施される中、国語の授業時間の確保が厳しくなっている。そんな中で、古典の授業には、ますます学習に時間がかかるようになっていくという矛盾を、なんとか解決していくことはできないものなのだろうか。そのための検討材料として、中学生に対し、どの程度まで、高等学校で実施する古典の学習内容に踏み込んでいくことが可能となるのかを目標とした試行的実践を行った。以下がその報告である。

2. 古典学習の前提となる素養調査——『古今集』による季題——

(1) 調査について

日本の古典を読み進めようとする際に不可欠と思われるのは季節に関する知識である。季節感とは『源氏物語』『枕草子』はむろんのこと御伽草子にも登場してくるし、季語を用いる俳句にいたっては当然のこととしてある。国際化が唱えられることの多い現在において、日本の文化や伝

統に対する関心や理解を深めるための働きが重視されつつある古典を、教室で取り扱う際に、日本人が持ち続けて来た季節に対する感覚に注意を払いそして教えることは重要なことと思われる。「ものあわれ」「みやび」といった平安時代の概念を扱う際にもその基本となるのは、季節に関わる事であろうと考えられる。

今回は古今和歌集四季の部立から季節に関わる物象事物を選び出して、それらのものを生徒がどれほど知っており、どの季節のものと認定できるかを調べてみることにした。歳時記によって、あまりに細分化された季語の世界を問うよりは、そうした古典の世界における季節感を形作る始発点となり、季節に関わる観念を形作る大きな根幹となった『古今和歌集』の季題を用いた方がよいと考えたからである。生徒たちの生活実感と、古典における季節に関わる事物とが、どれほど重なり合い、どれほど離反しているかを確認しようとしたわけである。アンケートは(別表1)のようなものを用いた。松田武夫『新釈古今和歌集』によれば四季の部立の歌題は五十六に分けられる。このアンケートは、その中から「立春」「逝く春」「夏月」「常夏」「六月晦日」「立秋」「秋風」「かなしき秋」「秋の夜」「秋の虫」「秋の野」「秋の草木」「逝く秋」「冬の山里」「年の暮」といった季節をあやまつことがないと考えられるものを外し、また「百千鳥」「呼子鳥」「百草の花」「山田」といった具体性を欠いて答えに窮すると考えられる物を外し、さらに、「鳴く前の郭公」「鳴き始める郭公」「鳴く郭公」や「初雪」「降りしきる雪」をそれぞれ「郭公」「雪」として一括するといった整理をして、尋ねる項目を三十としたものである。それぞれの季題について、季節を答えさせるとともに、どのようなものであるかをどの程度知っているのかを確かめるために5の項目も立ててみた。また、部立の調査に直接は関わらないものの、将来において授業を展開する際の参考にするために生徒たちの持つ季節感の有無とその実態を知ろうと、二の質問もしてみた。対象は1993年度における中二・中三・高一である。学校裁量時間を用いて二十分で答えさせたものである。

(2) 調査結果についての考察

調査の結果は(別表2)の通りである。結果内容についての詳しい分析を以下ですることとする。

「七夕」を除いては各学年間の数値傾向に大きな差はないと思われるので、以下に、三学年合計の数字によって、「知らない」の解答率が低いものからいくつかまとめて、結果を簡条書きに書き出してみる。

「桜」「解氷」「雪」「月」「薄」「紅葉」は、それぞれ「知らない」という解答が0.3%・2.5%・2.0%・1.8%・2.3%・1.5%であり、その季節の正答率も94.0%・89.0%・90.5%・87.0%・86.2%・88.0%となっていることから、実体もよく承知した上で、季節も紛れることがないし、「鶯」「鹿」「氷」「若葉」「霞」「梅」も、それぞれ「知らない」という解答が4.0%・4.8%・2.0%・6.8%・7.5%・2.3%であり、その季節の正答率も70.7%・63.7%・75.4%・67.2%・

54.6%・67.9%となっていることから、実体がほぼ明らかであるとともに、季節に揺れが生じるが解答もほぼ合っている。

「七夕」は、「知らない」が0.8%であるから七月七日という日は知っているのだが、中二・中三で「夏」と答えた割合は74.2%・65.0%であり、高一では「夏」が51.6%、「秋」と答えた割合が45.3%であるところを見ると、旧暦であると秋になるというあたりが中学生にはやや難しく、高校生になると旧暦のことを考慮して解答しているようである。

「菊」は、「知らない」は6.3%で実体はほぼ明らかであるが、現在のように一年中目にするものは、やはり体験上からの知識に欠けて答えが定まらないようで、季節の正答率は45.1%となってしまう。

「時雨」は、「知らない」が7.8%で実体は多少は明らかであるように見受けられるが、「春」「夏」「秋」「冬」がそれぞれ11.0%・48.1%・21.6%・15.0%であり、どういう雨のことを「時雨」と呼ぶのか理解しているとは思えない節がある。

「露」「郭公」「緑」「柳」は、「知らない」が5.5%・8.3%・2.3%・7.0%であり、それぞれ実体は明瞭であるものの、季節の特定は正答率が15.0%・29.3%・12.8%・10.5%と低くなっている。「緑」「柳」は、それらの生命力が盛んな時期をイメージしての解答のようで仕方がないものであろうが、「露」「郭公」については実体として把握できているのか疑念が生ずる。

「萩」「藤」「山吹」は、それぞれ「知らない」が12.3%・13.0%・18.5%となっていて実体は多少明らかであるように見受けられるが、「萩」が75.4%とその季節を特定出来るのに対して、「藤」「山吹」は23.1%・20.3%の季節正答率である。「藤」「山吹」は勅撰集でも扱った部立が「春」であったり「夏」であったりと揺れがあるのだから仕方がない気もするが、それぞれ「夏」・「秋」の解答が39.6%・17.5%と23.8%・36.1%となっているところを見ると、生徒が知っていると答えている実体にも疑念が生じる。

「帰雁」「雁」は、それぞれ「知らない」という解答が21.6%・8.5%となっており、季節の正答率が31.8%・54.1%となっている。「雁」と聞かれて渡り鳥であることなどの知識から季節についてはおよその見当をつけたものの、「帰雁」と聞かれたときにはどう考えるべきか見当がつかなかったであろう。「雁」の季節の答えとして日本にいる時期と考えて「冬」と答えた者が31.8%であることから、そうしたことが想像できる。

「月草」は、「知らない」という解答が30.3%であることから実体はよくわからないものの、季節の正答率は57.4%となっており、名前からその季節が特定出来るのであろう。

「蓮」「女郎花」「藤袴」「撫子」「橘」は、それぞれ「知らない」が20.3%・54.6%・39.1%・43.9%・46.1%であり、季節の正答率が47.6%・26.6%・33.3%・17.0%・24.8%となっている。「蓮」が多少実体も季節も特定できているが、「女郎花」「藤袴」「撫子」「橘」はあまり実体が定かではなく、したがってその季節も判断が付かないというところであろうか。確かに「撫子」のように咲いている期間が長いものは、知識がないと季節は特定できないものかもしれない。

これらのことを見ると、日本の古典において中心的な位置をしめる『古今集』に登場する物象においてさえも、もはや現代の生徒にはそこから季節感を感じ取ることは出来ていない。「桜」「雪」「月」「薄」「紅葉」といったものにだけ特権的に季節の事物としての位置が保たれているということができ、「鶯」「鹿」「氷」「若葉」「霞」「梅」も、かろうじてそれらに準ずる位置を与えることが出来るといったところであろうか。「藤」「山吹」「時雨」といったものに特徴的に見られるように「知っている」と称しても、その知識の実状に疑わしいものがあり、「女郎花」「藤袴」「撫子」「橘」などにおいては、生徒がそれらの植物を知っていることは期待できないであろう。したがって古典の授業の際、季節に関わる事物を扱う必要があるときにはその扱いはできるかぎり丁寧にし、実物・写真を紹介して生徒の曖昧な知識を確実なものとする手続が必要であるといえる。例えば『枕草子』「九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の」の段で萩の様子を教室で扱うとき、その実感を味わせることは、容易ではないことを了解しておかなくてはならない。「七夕」に代表されて見られるように、旧暦と新暦という大きなギャップがあることは確かであるが、二の解答に見られるように現在においても、生徒の意識の中で季節と物象事物とが関連を持って存在しており、現代的な季節感が醸成されていることも確かであり、そうしたものを契機として古典における季節の観念を取り扱っていくことは可能であろうとおもわれる。

また、参考までに（別表3）生徒たちの季節感を挙げた。およそ気象・行事・昆虫動物・食べ物・衣類・その他、といったまとめ方をしてある。実に多種多様の物象がそれぞれの季節を感じさせるものとして挙がっており、收拾が付かない状態である。思いの外に植物が多いとはいうものの、やはり行事が彼らの暦日意識・季節意識を形作っているようであり、『古今集』に代表される古典の世界における、季節に関わる物象とは随分さまを異にしている。

(別冊1) 『古今和歌集』 季題アンケート

一 次に挙げるのは、『古今和歌集』四季の部立にでてくる季題(季節を示す景物)のほとんどです。知っているものについても知らないものについても、考えて次のどの季節に該当するかをマークシートの「回答カード」にマークしなさい(また具体的にどのようなものか知らないものについては5もマークしなさい)。

選択番号	1 春	2 夏	3 秋	4 冬	5 知らない
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
19					
20					
21					
22					
23					
24					
25					
26					
27					
28					
29					
30					

二 君が平素の日常生活で四季を感じる景物は何でしょうか。各季節についてそれぞれ二つずつ、このプリントの以下の項目に書き出してみてください。

春	()	()	()
夏	()	()	()
秋	()	()	()
冬	()	()	()

(別表2)

『古今和歌集』季題アンケート
一の集計結果

	中学二年 (120名)					中学三年 (120名)				
	春	夏	秋	冬	知らない	春	夏	秋	冬	知らない
1 桜	118 (98.3)			2 (1.7)		115 (95.8)	3 (2.5)		1 (0.8)	
2 葦	79 (65.8)	23 (19.2)	7 (5.8)	9 (7.5)	8 (6.7)	93 (77.5)	11 (9.2)	8 (6.7)	5 (4.2)	2 (1.7)
3 ヒタ	1 (0.8)	89 (74.2)	30 (25.0)		1 (0.8)	1 (0.8)	78 (65.0)	38 (31.7)	1 (0.8)	
4 時雨	14 (11.7)	62 (51.7)	25 (20.8)	16 (13.3)	13 (10.8)	12 (10.0)	62 (51.7)	21 (17.5)	21 (17.5)	3 (2.5)
5 雁	5 (4.2)	3 (2.5)	57 (47.5)	49 (40.8)	21 (17.5)	4 (3.3)	5 (4.2)	77 (64.2)	31 (25.8)	3 (2.5)
6 解氷	109 (90.8)	2 (1.7)	2 (1.7)	7 (5.8)	3 (2.5)	111 (92.5)	2 (1.7)	1 (0.8)	3 (2.5)	2 (1.7)
7 鹿	5 (4.2)	11 (9.2)	82 (68.3)	20 (16.7)	9 (7.5)	3 (2.5)	6 (5.0)	90 (75.0)	16 (13.3)	2 (1.7)
8 水	3 (2.5)	21 (17.5)	1 (0.8)	94 (78.3)	2 (1.7)	3 (2.5)	16 (13.3)	4 (3.3)	95 (79.2)	2 (1.7)
9 藻	25 (20.8)	69 (57.5)	12 (10.0)	9 (7.5)	32 (26.7)	28 (23.3)	59 (49.2)	12 (10.0)	5 (4.2)	13 (10.8)
10 萩	7 (5.8)	6 (5.0)	99 (82.5)	4 (3.3)	21 (17.5)	6 (5.0)	10 (8.3)	95 (79.2)	3 (2.5)	6 (5.0)
11 荻葉	82 (68.3)	29 (24.2)	6 (4.2)	3 (2.5)	15 (12.5)	81 (67.5)	25 (20.8)		6 (5.0)	6 (5.0)
12 露	23 (19.2)	51 (42.5)	11 (9.2)	35 (29.2)	13 (10.8)	19 (15.8)	57 (47.5)	20 (16.7)	20 (16.7)	4 (3.3)
13 雪	2 (1.7)	1 (0.8)		114 (95.0)	4 (3.3)	4 (3.3)		1 (0.8)	113 (94.2)	1 (0.8)
14 楓	49 (40.8)	43 (35.8)	11 (9.2)	15 (12.5)	17 (14.2)	79 (65.8)	17 (14.2)	11 (9.2)	5 (4.2)	5 (4.2)
15 女郎花	18 (15.0)	26 (21.7)	49 (40.8)	8 (6.7)	80 (66.7)	19 (15.8)	26 (21.7)	27 (22.5)	3 (2.5)	45 (37.5)
16 郭公	49 (40.8)	40 (33.3)	27 (22.5)	3 (2.5)	14 (11.7)	60 (50.0)	29 (24.2)	17 (14.2)	5 (4.2)	8 (6.7)
17 桂	17 (14.2)	103 (85.8)	1 (0.8)		3 (2.5)	15 (12.5)	100 (83.3)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)
18 藤袴	25 (20.8)	33 (27.5)	40 (33.3)	10 (8.3)	60 (50.0)	24 (20.0)	15 (12.5)	43 (35.8)	8 (6.7)	31 (25.8)
19 柳	7 (5.8)	61 (50.8)	38 (31.7)	13 (10.8)	13 (10.8)	14 (11.7)	53 (44.2)	37 (30.8)	10 (8.3)	4 (3.3)
20 月	1 (0.8)	3 (2.5)	113 (94.2)	2 (1.7)	2 (1.7)		10 (8.3)	105 (87.5)	4 (3.3)	1 (0.8)
21 序	1 (0.8)	2 (1.7)	113 (94.2)	3 (2.5)	1 (0.8)	1 (0.8)	2 (1.7)	106 (88.3)	8 (6.7)	2 (1.7)
22 紅葉		1 (0.8)	115 (95.8)	4 (3.3)	1 (0.8)	1 (0.8)		108 (90.0)	9 (7.5)	1 (0.8)
23 阿彌	42 (35.0)	8 (6.7)	15 (12.5)	42 (35.0)	44 (36.7)	46 (38.3)	10 (8.3)	18 (15.0)	38 (31.7)	7 (5.8)
24 菊	15 (12.5)	31 (25.8)	54 (45.0)	21 (17.5)	5 (4.2)	12 (10.0)	17 (14.2)	59 (49.2)	24 (20.0)	7 (5.8)
25 梅	81 (67.5)	11 (9.2)	5 (4.2)	22 (18.3)	1 (0.8)	86 (71.7)	10 (8.3)	1 (0.8)	20 (16.7)	2 (1.7)
26 萱子	30 (25.0)	37 (30.8)	22 (18.3)	18 (15.0)	62 (51.7)	22 (18.3)	24 (20.0)	25 (20.8)	11 (9.2)	35 (29.2)
27 橘	24 (20.0)	37 (30.8)	32 (26.7)	15 (12.5)	67 (55.8)	19 (15.8)	29 (24.2)	19 (15.8)	12 (10.0)	40 (33.3)
28 月草	10 (8.3)	19 (15.8)	78 (65.0)	9 (7.5)	48 (40.0)	7 (5.8)	20 (16.7)	69 (57.5)	8 (6.7)	14 (11.7)
29 藤	23 (19.2)	54 (45.0)	36 (30.0)	6 (5.0)	18 (15.0)	32 (26.7)	47 (39.2)	26 (21.7)	8 (6.7)	6 (5.0)
30 山吹	34 (28.3)	26 (21.7)	42 (35.0)	15 (12.5)	30 (25.0)	29 (24.2)	17 (14.2)	38 (31.7)	21 (17.5)	13 (10.8)

高校一年
(159名)

三学年合計
(399名)

存	夏	秋	冬	知らない
142	13		2	1
(89.3)	(8.2)		(1.3)	(0.6)
110	27	4	12	6
(69.2)	(17.0)	(2.5)	(7.5)	(3.8)
4	82	72		2
(2.5)	(51.6)	(45.3)		(1.3)
18	68	40	23	15
(11.3)	(42.8)	(25.2)	(14.5)	(9.4)
8	17	82	47	10
(5.0)	(10.7)	(51.6)	(29.6)	(6.3)
135	9	4	8	5
(84.9)	(5.7)	(2.5)	(5.0)	(3.1)
17	20	82	31	8
(10.7)	(12.6)	(51.6)	(19.5)	(5.0)
14	27	3	112	4
(8.8)	(17.0)	(1.9)	(70.4)	(2.5)
46	62	19	9	37
(28.9)	(39.0)	(11.9)	(5.7)	(23.3)
7	16	107	15	22
(4.4)	(10.1)	(67.3)	(9.4)	(13.8)
105	38	5	8	6
(66.0)	(23.9)	(3.1)	(5.0)	(3.8)
36	48	29	43	5
(22.6)	(30.2)	(18.2)	(27.0)	(3.1)
17	3	2	134	3
(10.7)	(1.9)	(1.3)	(84.3)	(1.9)
90	26	15	22	8
(56.6)	(16.4)	(9.4)	(13.8)	(5.0)
27	31	30	4	93
(17.0)	(19.5)	(18.9)	(2.5)	(58.5)
65	48	27	9	11
(40.9)	(30.2)	(17.0)	(5.7)	(6.9)
19	124	8	3	5
(11.9)	(78.0)	(5.0)	(1.9)	(3.1)
27	37	49	8	65
(17.0)	(23.3)	(30.8)	(5.0)	(40.9)
21	71	45	16	11
(13.2)	(44.7)	(28.3)	(10.1)	(6.9)
1	17	130	7	4
(0.6)	(10.7)	(81.8)	(4.4)	(2.5)
5	3	125	23	6
(3.1)	(1.9)	(78.6)	(14.5)	(3.8)
2		128	24	4
(1.3)		(80.5)	(15.1)	(2.5)
39	10	27	60	35
(24.5)	(6.3)	(17.0)	(37.7)	(22.0)
27	34	67	20	13
(17.0)	(21.4)	(42.1)	(12.6)	(8.2)
104	15	10	28	6
(65.4)	(9.4)	(6.3)	(17.6)	(3.8)
36	31	21	20	78
(22.6)	(19.5)	(13.2)	(12.6)	(49.1)
33	33	28	14	77
(20.8)	(20.8)	(17.6)	(8.8)	(48.4)
6	22	82	11	59
(3.8)	(13.8)	(51.6)	(6.9)	(37.1)
37	57	33	10	28
(23.3)	(35.8)	(20.8)	(6.3)	(17.6)
18	27	64	25	31
(11.3)	(17.0)	(40.3)	(15.7)	(19.5)

存	夏	秋	冬	知らない
375	16		5	1
(94.0)	(4.0)		(1.3)	(0.3)
282	61	19	26	16
(70.7)	(15.3)	(4.8)	(6.5)	(4.0)
6	249	140	1	3
(1.5)	(62.4)	(35.1)	(0.3)	(0.8)
44	192	86	60	31
(11.0)	(48.1)	(21.6)	(15.0)	(7.8)
17	25	216	127	34
(4.3)	(6.3)	(54.1)	(31.8)	(8.5)
355	14	7	18	10
(89.0)	(3.5)	(1.8)	(4.5)	(2.5)
25	37	254	68	19
(6.3)	(9.3)	(63.7)	(17.0)	(4.8)
20	64	8	301	8
(5.0)	(16.0)	(2.0)	(75.4)	(2.0)
99	190	43	23	81
(24.8)	(47.6)	(10.8)	(5.8)	(20.3)
20	32	301	22	49
(5.0)	(8.0)	(75.4)	(5.5)	(12.3)
268	92	10	17	27
(67.2)	(23.1)	(2.5)	(4.3)	(6.8)
78	156	60	98	22
(19.5)	(39.1)	(15.0)	(24.6)	(5.5)
23	4	3	361	8
(5.8)	(1.0)	(0.8)	(90.5)	(2.0)
218	86	37	42	30
(54.6)	(21.6)	(9.3)	(10.5)	(7.5)
64	83	106	15	218
(16.0)	(20.8)	(26.6)	(3.8)	(54.6)
174	117	71	17	33
(43.6)	(29.3)	(17.8)	(4.3)	(8.3)
51	327	10	4	9
(12.8)	(82.0)	(2.5)	(1.0)	(2.3)
76	85	133	26	156
(19.0)	(21.3)	(33.3)	(6.5)	(39.1)
42	185	120	39	28
(10.5)	(46.4)	(30.1)	(9.8)	(7.0)
2	30	347	13	7
(0.5)	(7.5)	(87.0)	(3.3)	(1.8)
7	7	344	34	9
(1.8)	(1.8)	(86.2)	(8.5)	(2.3)
3	1	351	37	6
(0.8)	(0.3)	(88.0)	(9.3)	(1.5)
127	28	60	140	86
(31.8)	(7.0)	(15.0)	(35.1)	(21.6)
54	82	180	65	25
(13.5)	(20.6)	(45.1)	(16.3)	(6.3)
271	36	16	70	9
(67.9)	(9.0)	(4.0)	(17.5)	(2.3)
88	92	68	49	175
(22.1)	(23.1)	(17.0)	(12.3)	(43.9)
76	99	79	41	184
(19.0)	(24.8)	(19.8)	(10.3)	(46.1)
23	61	229	28	121
(5.8)	(15.3)	(57.4)	(7.0)	(30.3)
92	158	95	24	52
(23.1)	(39.6)	(23.8)	(6.0)	(13.0)
81	70	144	61	74
(20.3)	(17.5)	(36.1)	(15.3)	(18.5)

(別表3)

『古今和歌集』 季題アンケート
二の集計結果

Table with 5 columns: 季 (Season), 件数 (Number of items), 春 (Spring), 夏 (Summer), 秋 (Autumn), 計 (Total). Lists various festival and seasonal topics like '雪解けさき', '春風', 'あけぼの', etc.

Table with 5 columns: 季 (Season), 件数 (Number of items), 春 (Spring), 夏 (Summer), 秋 (Autumn), 計 (Total). Lists various festival and seasonal topics like '海', '梅雨', '夕立', 'さき', etc.

3. 試行的授業の実践報告

予備的調査の結果をふまえて、そこで指摘できる、いくつかの古典教育における問題点を視野において行った実践が以下である。中学生にたいして、1年生で『万葉集』を、2年生で『古今和歌集』を、3年生で『新古今和歌集』を、それぞれ試行的に実践した。

(1) 中学1年生——『万葉集』——

(日 時) 1993年 第2学期

(授業者) 石塚 修

(授業クラス) 中学1年 A・B・C組 男子123名

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

(教 材) 中学校『国語 1』 学校図書

言葉の世界「歌の言葉——日本の歌」

補助教材『古事記』・『万葉集』(本文は小学館日本古典全集)

宮越 賢『国語の資料 四訂版』正進社

(教材設定の理由)

予備調査の結果からもわかるように、季節感という点において、現在の中・高生のほとんどの生徒は、自覚して季節を感じたり、進んで自己の言語生活に季節感を取り入れたりしていない。そのような実態をふまえたとき、いかにして季節というものに対する生徒の自覚を促し、日本の伝統文化の中における季節というものを、改めて認識させるかが、課題となってくるであろう。特に中学1年生という時期にあって、そのことは大切であろう。今年度は、このことを念頭において1年間の授業を進めてきた。1学期には、巻頭教材、沢口たまみの随筆「ヒメギフチヨウ」を扱う中で、すでに「春」という季節と生命力との関わりを考える機会を設け、生徒各自が「春」をどのようにイメージしているかを考えさせる授業を実施した。それを受けて、2学期は、「歌」発生を考えつつ、季節の概念を捉えながら、季節感の再認識や獲得に結びつくような授業を試みたわけである。「和歌」を指導する場合、中学3年生で、いわゆる「三大和歌集」の歌風を比較しつつ授業をすすめる場合が多く、この傾向は、高校でも同様である。そこで中学1年生に、『古事記』・『万葉集』を授業として取り入れ、和歌の歴史的流れに沿って、順次学年を上げていくような方法は取れないものなのかを考えた。また、その場合に、どのような利点と欠点が出てくるのか、そのことも考え合わせながら実践した。

(授業展開 全12時間)

第1時 「うた」について

「うた」という言葉について漢字を見てみると、「唄」「唱」「歌」「謡」「謳」といった字が挙げられる。このそれぞれについて漢和辞典を使って調査させ、「うた」について生徒各自の概念を持たせるきっかけとした。また、

・自分なりに、人間にとって「うた」とはどんなものとかんがえますか。簡単にまとめてみましょう。

という課題を与え、各自で考えさせ、まとめさせた。何人かの生徒のまとめたものを、以下に紹介する。

人間が心の中で思っていることを言葉にして節をつけ、表現することによって自分の心を他の人に伝える。

人間の心を刺激したり、和らげたりする言葉の曲と合わさった音声。

自分たちが楽しくなったり、感動したりする心を動かすもの。

自分自身で歌ったり、他の人の歌を聞いたりして、その歌を楽しみ、その場の雰囲気や人の気持ちを和やかにしたりするためのもの。

「うた」は、それを口ずさんだり、聞いたりすることによって、悩み、疲れて乾いた人の心の中に、うるおいを与えてくれるものだと思う。

などという「うた」にたいする考えが出ていた。

第2時 言葉の世界「歌の言葉——日本の歌」

童謡「あんたがたどこさ」子守歌「坊やはよい子だ」民謡「ひえつき節」

唱歌「荒城の月」童謡「七つの子」歌謡曲「上を向いて歩こう」

の各教材を見ながら、前回の各自でまとめたさまざまな「うた」についての意味や考え方を前提として、いったい人は何のために「うた」を詠むのかを、全体の考えとしてまとめた。「うた」は「詩」すなわち「ことば」と「曲」すなわち「メロディー」が一体になり、「人の心」を表現しようとするために作られると考えられるのではないかという結論となった。

第3時 『古事記』『倭建命の伝説』

ここでは、倭建命の伝説に関わる古代歌謡を中心に扱い、本文には全て現代語訳を付

した。倭建命が父景行天皇の命令によって東国に向うに至った経緯をまず説明した。次に「言向く」という動詞に注目させ、なぜ、「武力で征服すること」をそういうのか、その背景にある「言霊」の考えについて説明した。

第4時 『古事記』「尾張の一つ松」

前回の「言霊」の考え方にそって「一つ松」の歌謡を考えてみた。ここに見られる歌謡の特色として、

「一つ松」が繰り返されている。

「あせを」という「はやしことば」が使われている。

「一つ松」を擬人化している。

が指摘できることから、歌謡の持つ表現上の特色が、詠む対象を讃えたり、恐れたりする詠む側の心の在り方から生じてきたことを考えさせた。また、「旅」にあって古代人がなぜ「うた」を土地土地で詠んだのかも合わせて考えた。

第5時 『古事記』「望郷の歌」

倭建命の死をひかえての「国偲ふうた」を取りあげ、「うた」と人間の生命力、植物と人間の生命力との関りを考えた。

第6時 『古事記』「倭建命の死」

倭建命の死に際しての挽歌を扱い、人が死ぬと、なぜ、その遺族は「うた」を詠んだのかを考えた。また「死」という語を用いずに、人の死を表現している巧みさも考えた。古代の人々にとって、「うた」は現代人と違った意味を持つ部分と、現代人と変わらない意味付けを持つ部分とがあることを考え、これまで学習した歌謡の中から、該当する部分を指摘させた。それによって「うた」の人間社会での果たす役割をより明確化できるようにした。

第7時 『万葉集』について

『万葉集』についての文学史的説明を内容・形式の上から行って、学習の予備段階とした。

第8・9時 『万葉集』「天皇と歌」

巻頭の雄略・舒明天皇の長歌を扱い、「うた」の公的性格を考えた。現代では考えにくい「うた」の概念ではあるが、「うた」の発生とは切り離すことができないところがあるので、「歌会始め」などを例に引きつつ、政治と祭祀、祭祀と天皇の関りについて

説明し、「うた」の持つ伝統の一つである儀式の場での役割について、「国見」の歌を扱いつつ、理解を深めさせた。

第10時・11時 『万葉集』「宴席と歌」

前回の「うた」の持つ公的な性格に対して、私的な部分を考えていくことにした。さらに、額田王・柿本人麻呂といった宮廷歌人の発生とその果たした役割についても考えた。額田王「春秋優劣歌」を中心に扱った。

第12時 『万葉集』「さまざまな歌」

『国語の資料』に採録されている歌の中から、後期の歌人の代表作を取り上げて解釈し今後の学習へのつなぎとした。

柿本人麻呂

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾ぶきぬ
淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ

山上憶良

瓜食めば 子ども思ほゆ……

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも

山部赤人

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貫き……

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける
大伴家持

うらうらに照れる春日にひばり上がり情悲しもひとりし思へば

(今回の試みについての検討)

中学1年生に対して『古事記』『万葉集』を、教材として扱うには、難しい点多かった。言葉のうえて、今日と大きくかけ離れていることはもちろんのこと、内容的にもなかなか理解しづらい部分があったようである。現代語訳を付けた本文で実施したのは、内容理解は、現代語によってでも致し方ないと考えたからである。ただ、生徒の中には、『古事記』『万葉集』が、漢字の読みをうまく日本語にあてていることに興味を持ったものが多かったので、原文を提示することは、けっして無駄ではなかったと思う。文字への興味関心を抱かせる上で、むしろ良かったといえよう。また、「うた」の発生をどのようにとらえるのか諸説あるところと思うが、土橋 寛が「私は歌謡を、人間生活に生きて機能しているものとしてとらえる。ということは、叙情詩のように一人の作者によって制作された静的な作品としてではなく、動的な言語行動として生態学的にとらえることであり、したがってその視点は歌の場、歌の機能、歌い手と聞き手との関係に置

かれる。』（『古代歌謡全注釈 古事記編』角川書店 昭和47年 P14）述べているように、「うた」を書物の中から解放するような方向で、授業を進めたつもりである。より積極的に音声言語の指導といった面からの扱い方もあろうかと思うが、今回の試みとしては、生徒の中での「和歌」にたいしての抵抗感を少しでも和らげていくために、現在の我々が「うた」を「うたう」ことと近い私的な「うた」の在り方を考えつつ、その対極にある儀礼・祭祀の場における「うた」を考えさせて、その二つの流れについて理解させることに中心を置いた。『古今和歌集』といった歌集が作られていくには、どのような古代和歌の流れがあったのか、その理解を十分に深めさせることはできたと考える。和歌の授業という、「三大歌集」を並べて、歌風の変化を、数首の歌から読ませてすませてしまう授業が多い。しかし、なぜ和歌が、日本文学の中心的存在として創り続けられたのを考えさせるためには、単なる比較に留めてはならないと思う。そのためにも、和歌の源流に遡って「うた」そのものの発生から考えさせるような授業が、中学1年であって然るべきであろう。その点から見て、今回の試みは、重要であったといえよう。

（2）中学2年——『古今和歌集』——

（日時） 1993年度2学期

（授業者） 福田 孝

（授業クラス） 中学2年A・B・C組 男子124名

（研究テーマ） 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

（教材） 巻第一 春歌上32～48番歌

（旺文社文庫『現代語訳対照 古今和歌集』 小町谷照彦訳注 を用いた）

（教材設定の理由）

中学二年生に『古今和歌集』を読ませることは出来ないか。『古今和歌集』の歌は観念的であるとか、理屈っぽいといった非難がよく聞かれる。それに対して生徒は往々にして詩とは自分の感情を素直に感じたままに言葉に置き換えるものだという先入観を持っている。そうした生徒に、言葉の意識的な操作によって言葉だけで現実とは別個の世界を組み立てようとする『古今集』の歌の世界を分からせる。十分に理解させたり詩情を味わうところはできなくても『古今和歌集』の歌の有り様をそれなりに説明し、『古今和歌集』的な詩世界も有り得ることを理解させれば、中学生の授業で『古今集』を扱う意義は十分にあると思われる。

『古今和歌集』の和歌を中学二年生の授業で扱うにあたって以下のような点に留意した。『古今和歌集』を扱う前に『万葉集』の歌を副教材（『国語の資料 三訂版』宮越賢編 正進社）を通して主として扱った。雄略天皇長歌・有間皇子自傷歌・額田王「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」・大津皇子挽歌といった歌を、「うた」の公的性格を中心に据えて扱ったわけだが、それらの歌々を扱おうとする歌は歌自体では扱い切れず、必ず歌が詠まれ

るに至った歴史的背景を説明する必要が生じ、歌の授業を行っているのか、歴史の授業を行っているのか分からなくなるというのが実状である。『古今和歌集』ではこの歌集中の代表的な歌だけを扱おうとすると、歴史的な背景説明は不要であるものの、一首をめぐって観念的な歌内容を授業者側からの一方的に説明することに終始してしまう可能性がある。そしてまた、『古今和歌集』は一首一首の歌が独立した文芸作品であると同時に、『古今和歌集』という編集された歌集内部で他の歌と関連を持って配列されているわけである。一首一首をめぐって観念的な歌内容の説明や歌の技法的な説明は不可避ではあるものの、『古今和歌集』を扱うからには歌の配列を視野におさめた上で授業で扱いたいと考えてもみた。それは古典の授業は往々にして教師主導型の授業形態を取りがちであるので『古今集』の配列を考えさせることで幾分かでも生徒参加型の授業形態の性格を帯びさせたい要素も合わせ持っている。「梅」に関わる一七首を選んだ理由は、生徒が知っている梅の花と『古今和歌集』での「梅」の詠われ方の落差を利用すれば古今的な歌の性質を理解させやすくなるのではないかと考えたこと、比較的少数の歌数で「時の推移」の配列を理解させることができること、予備調査に関わるような季節感を確立した作品としての『古今和歌集』の性質にも言及することが出来る、といった理由による。

(授業展開 全8時間)

第1時 『万葉集』と『古今集』との配列意識の違い

前時間まで扱ってきた『万葉集』の歌の配列の基本（とくに第一巻・第二巻に顕著である、制作年次順）を説明確認して、『古今集』が成立した時代背景を説明した上で、『古今集』には『万葉集』とは異なった歌の配列意識があることを示唆し、それを授業で確認する趣旨の前置きをする。

第2時 『古今集』の歌の特徴と梅の花の詠われ方

『古今集』巻第一の32番歌から48番歌までの「梅」歌群を、歌と同時に詞書までが現代語訳されている注釈書でプリントにして配布し、まず32番歌「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯の鳴く」・33番歌「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」により、「香」を中心として詠まれる梅の花のことで、『古今集』の観念的な歌の特質と、説明する。またこの二首が対称的な歌内容を持っていることも指摘して、以下十五首も何首かずつで組みになり、関連性を持って並んでいることを示唆する。

第3時 本文の通訳と解釈

前時を受けて一時間をかけて歌内容を現代語訳によって確認する。また何首で組みになり、またそれはどういう関連で配列されているかの確認を考慮するように示唆する。

その際、身近にいる友人同士で相談させる。

第4時 「梅」の歌の組み構成の発表

前時を受けて何人かにそれぞれが考えた組みをその理由とともに発表させ、それを板書する。

第5時 「梅」の歌の各歌の解釈と組み構成の検討（1）

前時までを受けて一首一首を読み、それぞれの歌が男性女性どちらの歌であるかといったことを確認しながら組みに分けつつ、配列の基準を説明する。

第6時 「梅」の歌の各歌の解釈と組み構成の検討（2）

第7時 「梅」の歌の各歌の解釈と組み構成の検討（3）

第8時 まとめ

44番歌から48番歌を根拠にしながら、「梅」歌群が時間の推移に従いつつ、大きく歌々が配列されていたことに気付かせる。巻一から巻六までの四季の部立がやはり大きく時間の推移に従って季節に関わる事物を詠んだ歌を配列していることをプリントにより確認して、『万葉集』の配列原理とは異なることを確認させる。

（今回の試みについての検討）

観念的な歌内容の説明に多く時間が取られ、まだ古語に慣れないうちに作業に取り組ませたため、『古今和歌集』の歌は難解であるとの印象が生徒に残ってしまったように思われる。先にも書いたように詩とは自分の感情を素直に感じたままに言葉に置き換えるものだという先入観を持ち、言葉と言葉の新鮮なぶつかり合いがありさえすればよい詩だと感じている生徒には、『古今和歌集』の歌の抒情が実感できるには時期尚早であるのかも知れない。が、理屈をたてることで歌が出来上がっている『古今和歌集』の歌の有り様に戸惑いつつもある程度の理解を示しているように見受けられた。また、全く別の時に別な人が詠んだ歌々が編集の手を経て相互に関連付けられて配置されることによって別の大きな作品世界を構成出来ることが分かり、その点で興味を持つ生徒もいた。その意味で多少なりとも、生徒の詩の理解に揺さぶりをかけることができていたと思われる。後世の季節感の把握の仕方に多大な影響を与えた『古今和歌集』が、『万葉集』とは違った編集方法で編まれているということを理解しただけでもその収穫は大きいのではないかと考えている。古典の学習意義をどこに据えるかに関係してくるのだろうが、自分たちが考えているのとは別の詩の世界が存在し、それが作り出した季節感という伝統が日本文学の伝統とし

て脈々と受け継がれていることを理解するのであれば、中学二年という時期を捕らえて『古今和歌集』の学習を行うこともあながち悪くないと考えられる。

また中学の時期の古典学習の意義を、古典に親しませることに置くならば、身近な花札の絵柄と『古今和歌集』の歌の内容との共通性に気付かせることから『古今和歌集』と現代との関わり合いを考えることもできるかもしれない。あるいは単純にものを編集するときには必ずなんらかの編集方針が存在するであろうことから、生徒自身に『古今和歌集』の配列原理に気付かせるといった接近方法もあり得る気がする。

(3) 中学3年——『新古今和歌集』——

(日時) 1993年度3学期

(授業クラス) 中学3年A・B・C組 男子121名

(授業者) 須藤 敬

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

(教材) 大岡信「夢のうたの系譜——多義的な夢の氾濫について——」(岩波書店 同時代ライブラリー86『私の古典詩選』1991年11月刊より)

(教材設定の理由)

『万葉集』『古今集』と学年進行に沿って学習してきた仕上げとして、いかに『新古今集』を扱うか。もちろん代表歌のいくつかを解釈、鑑賞するという方法も考えられたが、以下の理由で、上記の教材を取り上げることにした。

『新古今集』を学ぶ意義は『新古今集』という1作品にとどまらない、中世に広く浸透する美意識の有様を知ることにあると考えられる。中世という時代の持つ雰囲気の中で、『新古今集』を位置付けていくためには、あるトータルな視点が必要になろう。その意味で上記の教材は、「夢」をキーワードにして、『新古今集』を中心に韻文の系譜を辿るものである点、格好の文章である。また本校国語科では、以前、「中・高6ヶ年を見通した現代文の教材編成」の研究プロジェクトを実施したが、そのとき1つの問題点として指摘したことは、現行の教科書に載る評論文が難易度の点で、中学3年生用と高校1年生用との間では随分開きがあるということであった。中学生最後の教材として、高校への橋渡しの意味を含め、やや骨のある評論を読んでおくという目的にも本教材はかなうものと考えられる。

以上の理由から、本教材は代表歌をただ解釈・鑑賞するだけでは得られない効果が期待できるものとする。

(授業展開 全11時間)

第1時 全文通読、難解語句の確認

一般語彙は読みをこちらで示し、意味は宿題とする。固有名詞(梁塵秘抄・新古今

集・藤原定家・俊成卿女・親鸞・万葉集・建礼門院右京太夫・式子内親王・閑吟集，等)は、通常、授業中に用意している『国語の資料』(宮越賢編 正進社)で調べ、足りない部分を補足説明する。またこれまで読んできた文学作品に、「夢」を素材として扱ったものがなかったか考えてくることを課題とする。

第2時 古典文芸にあらわれる「夢」の定義

『梁塵秘抄』法文歌「仏は常に在せども／現ならぬぞあはれなる／人の音せぬ暁に／ほのかに夢に見えたまふ」の解釈を通して、「夢」が「泡沫のごとき現実」と「現実を越えた永遠的な神秘の世界」を意味するという筆者の定義を理解させ、「夢」の語を多義性、及びその背景にある末世思想・無常観を説明する。また補助資料として、『更級日記』の、作者が夢に阿弥陀如来をみたという記事を配布する。

第3時 「夢」を詠み込んだ『新古今集』の歌の読解(1)

第4時 「夢」を詠み込んだ『新古今集』の歌の読解(2)

筆者が引用する次の3首の和歌の解釈をする。

春の世の夢の浮橋とだえして嶺にわかる横雲の空 藤原 定家
風かよふ寝覚の袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢 俊成卿女
橋のほふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする 同 上

本歌取り・本説により1首の中に詠みこまれる世界が重層的になり、それがまた歌意を曖昧にしていることを理解させ、歌をそのように導くものとして「夢」という語が機能していることを気付かせる。また「夢」が多義的な曖昧さゆえに暗示性を伴うことを考えさせる。

第5時 「夢」の機能

筆者が挙げる、親鸞の妻恵信尼が娘にあてて書いた手紙に語られている霊夢の話を読み、さらに「夢」に、ある特殊な力を認めていた古代の人々の話を紹介しつつ、「夢」の持つ機能について考えさせる。

第6時 『万葉集』における「夢」

『万葉集』における「夢」が、後の中世の「夢」に見出せるような、泡沫のごときはかないものではないことを、論旨に従って確認していく。その際、「夢」をみる主体の有り様に注意を払うように留意する。

第7時 建礼門院右京大夫・式子内親王の「夢」を素材にした歌の読解（1）

第8時 建礼門院右京大夫・式子内親王の「夢」を素材にした歌の読解（2）

第9時 建礼門院右京大夫・式子内親王の「夢」を素材にした歌の読解（3）

筆者が引用する次の9首の和歌の解釈をする。

なべて世のはかなきことを悲しとはかかる夢みぬ人やいひけむ
今や夢昔やゆめと迷はれていかに思へどうつつともなき（以上、建礼門院右京大夫）
しづかなる暁ごとに見わたせばまだ深き夜の夢ぞかなしき
見しことも見ぬ行末も仮初の枕に浮ぶまぼろしの内
始なき夢を夢とも知らずしてこの終りにや覚め果てぬべき
かへりこぬ昔を今と思ひねの夢の枕に匂ふたちばな
み山べのそことも知らぬ旅枕現も夢もかをる春かな
はかなしや枕さだめぬうたたねにほのかにまよふ夢のかよひ路
時鳥そのかみやまの旅枕ほの語らひし空ぞ忘れぬ（以上、式子内親王）

二人の歌人の抱える背景、例えば建礼門院右京大夫は平家一門との関わりを、式子内親王は齋院という宗教的職掌との関わりを説明し、個々の歌の読解を進める。ここでは「夢」がはかない現実を示すと同時に、非現実（例えば欣求浄土）をも示す、即ち現実と非現実を曖昧にするものとしての「夢」の語の働きを中心に考え、そのことから『万葉集』の「夢」の歌にはなかった夢幻性、耽美性が獲得されたことを理解させる。

第10時 近代流行歌における「夢」

近代流行歌で多く用いられるモチーフと「夢」の持つ意味との重なりが多いことを確認した後、『閑吟集』の「世のなかはちろりに過ぎる、ちろりちろり／ただ人は情あれ、夢の夢の夢の、昨日は今日は古へ、今日は明日の昔／くすむ人は見られぬ、夢の夢の夢の世を、現顔して／なにせうぞくすんで、一期は夢よ、ただ狂へ」を読み、無常観や孤独感の、これまで見てきたものとは違った表明の仕方を知る。

第11時 まとめ

芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を用い、日本人が共有する、「夢」によって醸し出される情緒についてまとめていく。そして「夢」という語が多義的に、かつ頻繁に用いられてきたこの意義を探ると同時に、そのことから日本人のどういった心性がうかがえるかを今後の課題として提示しておく。

(今回の試みについての検討)

『新古今和歌集』を読むことと、1つの評論を読むことの2つの目的を同時に目指したことによって生徒側に混乱が生じたことは否めない。また授業内容から授業者の講義が中心となってしまう、生徒の理解度を確認しつつ授業を進行させるという点では不十分であった。一方、『新古今和歌集』を単独に、かつ限定的に捉えることなく、日本人の精神史や文学史の上に位置付けて捉えるという方法、「夢」という1つの素材を用い、時代やジャンルを越えてものを見ていく視点、等が生徒の中で少しは開かれたのではないかと思う。しかし、中学生にとって今回の授業のままでは、難解であることは間違いない。今回の試みを、高校生を対象に実施したり、中学生には設定時間を増やすことによって、より有効な教材になるよう、検討を続けていきたい。

4. おわりに

「中、高6ヶ年を見通した古典教材の編成」(その予備的調査3ならびに試行的実践2)として実施した、今回の『古今和歌集』の季節感調査と、中学校3年間に涉っての三大和歌集の授業の試みであった。実施した中で浮かんできた、現在の中・高生の季節感の喪失の実態は、今後の古典教育を考えていく中で、貴重な資料となると考える。古典的素養が、大きく失われている生徒の実態に対して、どのような教材を配列してどう指導してゆくべきかは、今後おおいに検討してゆく必要がある。その際に、どの程度までを中学生に与えることが可能性としてあるのか、そのことを実際の授業において試みて実践したのである。一部検討しなくてはならない部分を残してはいるものの、その実践は、あながち無謀とは言えないことは、実践報告を読んで頂ければわかるかと思う。実際、なかなか教科書を踏みだして古典教材を扱うことは、中学生の場合、実践例が少ないようである。その点からも、今回の実践を、今後ひとつの中学生に対する古典教育の検討材料として提示し、おおいに活かされることを期待したい。